

かんだ けんいち
神田 健一

アウトリーチ・・・

●基幹労連・事務局長

① 新たなつながりの中で見つけた言葉 “アウトリーチ”

昨年9月より、ふるさと大分を離れ三度目のお江戸勤めとなった。2000年9月から2004年が最初、そして前回は2006年より2010年まで基幹労連本部でモノづくりの現場を基軸とした好循環の運動に「しらしんけん（大分弁で一生懸命）」関わってきた…つもりである。

2010年9月に大分へ帰任し、出身単組はもとより、連合をはじめとする地域労働運動に携わってきた。それと並行して、大分地区労福協会長の任に就き、違う視点からいろんな教えをいただいた。

労働者福祉運動は、労働運動の延長線上にあることは言うまでもないが、各種会議や諸行事の取り組みを通じて、関係団体・組織、そして地元の方々との関わりやふれあいは、塀の外に一歩足を踏み出した感さえあった。

そうしたお付き合いの中で、大分県労福協の専務理事に就任されたばかりのH氏が構成組織の大会において、「アウトリーチ」という表現を使い、労働者福祉の思いを熱く語られたことが印象に残っている。

そのアウトリーチ（Reach Out）とは、いろんな分野での取り組みを象徴するものらしいが、例えば、社会福祉事業者がクライアントのところへ直接出向き、心理的なケアや必要な支援を行ったり、地方自治体においては、住民主体のまちづくりに向けた県民・市民の声の収集、また、医療分野においても、

昨今では開業医のみならず法人化された病院も行ないはじめた往診もその一つらしい。

私たち個々人に置き換えれば、「手を差し伸べる」という思いを行動に移すことと受け止めて良いのではないだろうか。

そうした点において、忘れてはならない東日本大震災。あれからもう3年9カ月が経過したが、未だ、避難者数は24万7,233人（2014.7時点）、仮設住宅等から恒久住宅等への移転が始まりつつあるというもの、被災3県によると約8万9千人はプレハブ住宅での暮らしが続いているという。加えて、原発事故の一刻も早い収束が待ち望まれる中で、越境入学や転校など子供たちの教育や根本的な課題である生活支援、雇用対策など、復興・再生の道のりは遠い。昨年発生した、広島豪雨や御嶽山の噴火など、突然の自然災害・事故は、何時どこで起きるかわからない。被災地・被災者の思いを自らに置き換えて、労働運動・福祉活動にも生かしていかなければならない。

② “絆”という文字から考える“アウトリーチ”

ところで、昨年、大分県中央メーデーでこんな話をさせていただいた。『東日本大震災を契機に、絆という文字が目につくようになりました。絆という字は糸へんに半分と書きます。その糸とは互いが持てる大きさ・長さでなければ絆は結ばれません。決して大きな力を持つものが振り回すことがあってはいけ



ないのです。その大きさとは何なのか、経済力かもしれないし、障害を持つ方々の目から見れば健康な身体かもしれない、また、権力かもしれません。絆とは相手の目線で、相手の思いを察しながら、半分半分の糸をしっかり握りあうことが大切です。そのことをより多くの仲間と実践すれば、糸へんに半分ずつと書いた文字に恥じない絆は生まれるものと信じています。』

少し、きざな言い方だったかもしれないが、昨年来、私たちを取り巻く環境は、労働者保護ルールの問題一つとっても、大きな力を持ったものが、懸命に働き・地道に生活するものに対し、糸を振り回してはいないだろうかと思えてならない。社会から無くさなければならぬ格差・差別・貧困の三つの文字が、大きくなっていないだろうか。

「アウトリーチ」その取り組みの目的、方法は様々であるが、“互いに相手の立場にたって手を差し伸べること”を本意と受け止めたい。繰り返しになるが、力あるものが、これ見よがしに手を差し伸べてやる！ということはあるとはならない。

労働運動は、互いの力合わせで、組合員とその家族、そしてすべての働く者・生活者の幸せを追求するものである。

基幹労連の綱領に「私たちは、同じ志をもつ組織や仲間と連携し、自由、平等、公正で、安心して暮らせる福祉社会の実現を目指します。」とある。労働組合の綱領には、表現に多少の違いはあるが、間違いなく同様の内

容が記されているはず。原点回帰という言葉は、振り子のごとく時々運動方針にも戻ってくるが、私たちは、その基軸を忘れることなく、常に意識し、行動に移していかなければならない。

③ 2015年は、“アウトリーチ”のスタートにふさわしい年

今年の干支は未（羊）。“美しい”という文字の中に隠れているが、その語源は、『万葉集に父母を見れば尊し妻子見れば米具斯宇都久志（めぐしうつくし）とあるように、上代（大昔）では妻子など自分より弱いものに対して抱く慈しみの感情を表した。そして、平安初期以降、小さいものや幼いものに対する「かわいい」「いとおいしい」といった感情を表すようになり、平安末期ごろから「うつくしい」は「きれいだ」を意味するようになったという。そして、漢字の「美しい」は「羊+大」で、形の良い大きなヒツジを表しており、中国古代の王朝「周」の人々が、ヒツジを最も大切な家畜としていたことからと考えられる。』とネット情報にある。

ヒツジに負けない、あったかな思いをもって、美しく手を差し伸べあえる・アウトリーチのスタートの年となればと願っている。

「ご安全に！」基幹労連で交わされる挨拶は、仲間の安全と健康を願い、自らの誓いを込めた掛け声である。アウトリーチ、意外と身近なところにもあったようである。

ご安全に